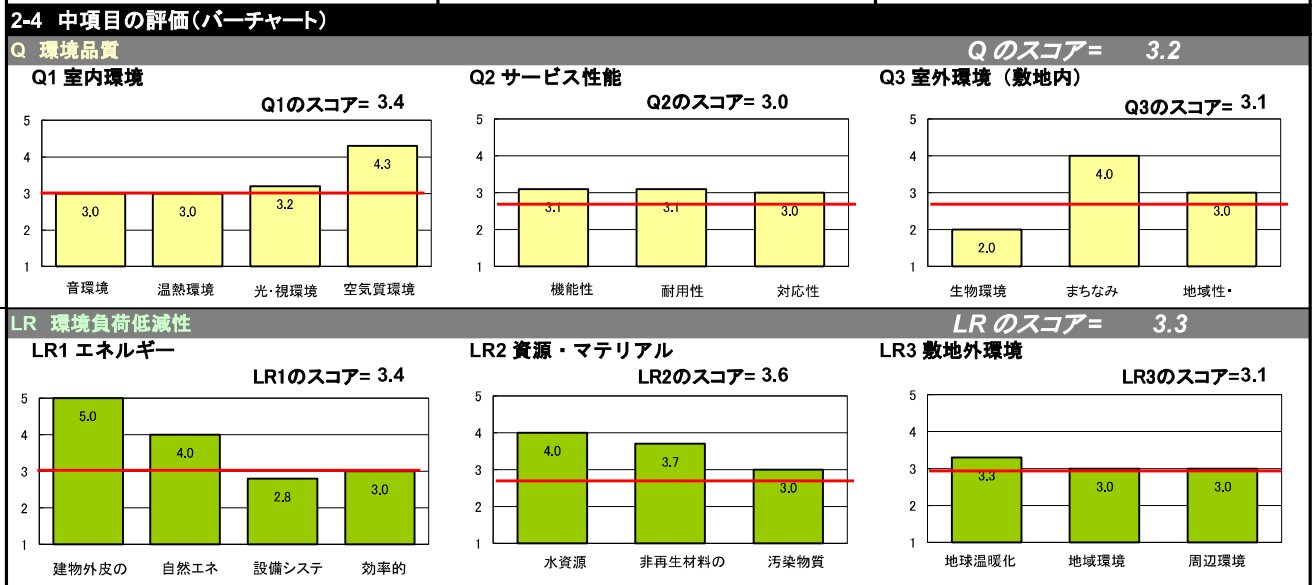
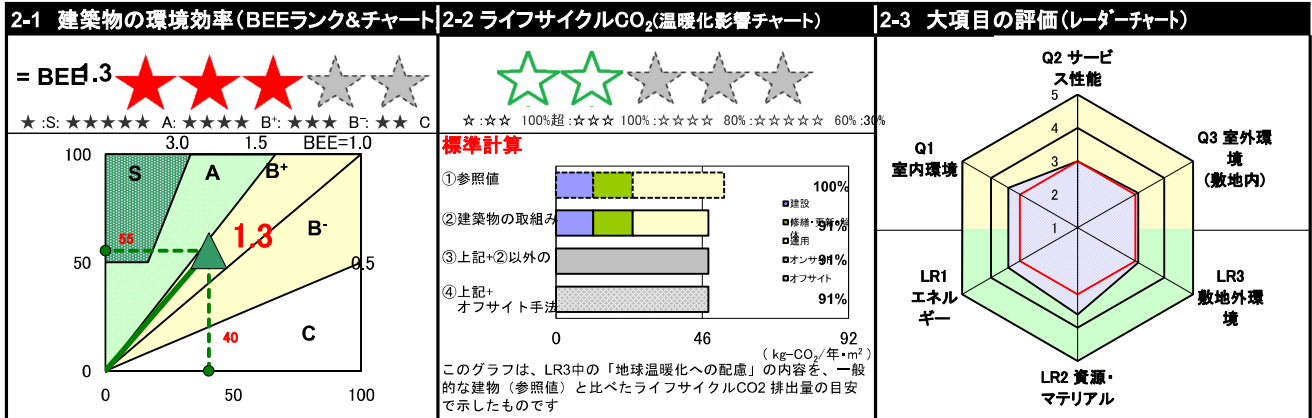


CASBEE® 名古屋

評価結果

■ 使用評価マニュアル: CASBEE 建築物環境性能評価システムマニュアル2016 (使用評価ソフト: CASBEE_Nagoya_2016(v3.0))

1-1 建物概要		1-2 外観	
建物名称	ドルトンスクール名古屋	階数	地上4F
建設地	名古屋市中千種区今池二丁目201, 202, 203, 204	構造	RC造
用途地域	準工業、第1種住居、第2種住居、準防火地域	平均居住人員	250 人
地域区分	6地域	年間使用時間	3,600 時間/年(想定値)
建物用途	学校	評価の段階	
竣工年	2024年8月 予定	評価の実施日	2022年9月15日
敷地面積	2,637 m ²	作成者	
建築面積	1,021 m ²	確認日	2022年9月20日
延床面積	2,907 m ²	確認者	



3 設計上の配慮事項		
総合 現本館のイメージを踏襲した重厚なタイル仕上げや窓形状を採用することにより落ち着きと品格を重視したデザインとし、隣接地とは明確に区別した世界観・雰囲気のあるドルトンの伝統と記憶を継承するデザインとした。		その他
Q1 室内環境 出来るだけ自然光を取り入れる計画としている。また、室内についてはF☆☆☆☆の材料を全面的に使用している。	Q2 サービス性能 メンテナンスのしやすさ、耐久性の確保、階高設定の余裕などにより、長く使えることを意識した計画とした。	Q3 室外環境(敷地内) 必要な緑地を街並みに対して効果的に配置し、植栽とレンガ調タイルにより伝統的で良好な景観をつくり出した。
LR1 エネルギー 外壁断熱材により外皮性能を高め熱負荷を抑制した。	LR2 資源・マテリアル 節水型の器具を採用している。	LR3 敷地外環境 駐車場や駐輪場、ゴミ置き場などを適切に設け、近隣に迷惑とならないよう、スムーズに利用できるよう配慮した。

■ CASBEE: Comprehensive Assessment System for Built Environment Efficiency (建築環境総合性能評価システム)

■ Q: Quality (建築物の環境品質)、L: Load (建築物の環境負荷)、LR: Load Reduction (建築物の環境負荷低減性)、BEE: Built Environment Efficiency (建築物の環境効率)

■ 「ライフサイクルCO₂」とは、建築物の部材生産・建設から運用、改修、解体廃棄に至る一生涯の間の二酸化炭素排出量を、建築物の寿命年数で除した年間二酸化炭素排出量のこと■ 評価対象のライフサイクルCO₂排出量は、Q2、LR1、LR2中の建築物の寿命、省エネルギー、省資源などの項目の評価結果から自動的に算出される

重点項目スコア・結果シート

ドルトンスクール名古屋

■使用評価マニュアル:

CASBEE-建築(新築)2016年版、名古屋市建築物環境配慮制度運用マニュアル2

■評価ソフト:

CASBEE_Nagoya_2016(v3.0)

重点項目		評価	全体に対する 重み係数	重点項目 スコア
1. 温暖化対策				3.3
LR1	エネルギー	3.4	0.4	
LR3.1	地球温暖化への配慮	3.3	0.1	
LR3.2.2	温熱環境悪化の改善	3.0	0.05	
2. 自然共生				2.3
Q3.1	生物環境の保全と創出	2.0	0.09	
Q3.3.1	地域性への配慮、快適性の向上	無	0.009	
Q3.2	まちなみ・景観への配慮			
Q3.3.2	敷地内温熱環境の向上			
3. 循環型社会				3.7
LR2.1	水資源保護	4.0	0.06	
LR2.2	非再生性資源の使用量削減	3.7	0.18	
LR3.2.3	地域インフラへの負荷抑制 ※2	3.0	0.01875	

結果

1. 温暖化対策

評価点 = 3.3



2. 自然共生

評価点 = 2.3



3. 循環型社会

評価点 = 3.7



重点項目のスコアは以下のように算出している。

$$\text{重点項目スコア} = \frac{(\text{評価点} \times \text{全体に対する重み}) \text{の総和}}{\text{全体に対する重みの総和}}$$

※1 ここでは、Q3. 3. 1の評価する取組みのうち評価項目 1) 2) 地域性のある材料の使用 又は、Q3. 2において評価する取組みのうち評価項目 4) 地域性のある素材による良好な景観形成 のいずれかでポイントがある場合は「有」、ない場合は「無」を評価とした。重点項目スコアの算出における評価点は評価「有」の場合は5、「無」の場合は1とし、重みはQ3. 3. 1の全体に対する重みに0. 2を乗じたものとしている。

※2 ここでは、LR3. 2. 3のうち、LR3. 2. 3. 3 交通負荷抑制 を除いたもので評価点及び全体に対する重み係数を算出している。したがって、ここでの評価点はスコアシートにおけるLR3. 2. 3の評価点とは異なるものである。